

炎と水

—『源氏物語』六条御息所をかたどる表現—

亀 田 夕 佳

はじめに

物語にとって「和歌」がどのような働きを持つものであるのかを考えた時、詠出される和歌の重要性はいうまでもないだろう。これまでの研究史においてもそうした考察は多く積み重ねられてきた。だが「和歌」の持つ重要性は、個々の和歌の存在性に留まるものではあるまい。「和歌」を構成する「歌ことば」の発想が果たす役割についても、まだまだ多くの課題を見出しうる状況にあると思われる。

今回取り上げる六条御息所という人は、光源氏が青年期を始めるにあたって関わった女君であるが、自らを律する自制心と自尊心の強さゆえに「もののけ」になるという運命を背負った人物である。彼女は濡標の巻で没するが、亡くなったのちも若菜下巻では紫の上に取り憑き危篤に陥れ、柏木巻でも女三宮の受戒の際に死霊となって現れる。

そうした御息所がどのような心の軌跡をたどった女君であるのかを考える上で興味深いのは、心のうちの「思ひ」を鎮めるために「水辺」に赴くという「歌ことば」の発想である。いくつか示そう。

すり

とびかよふくさのほたるはいとどしくこのかはべにやひかりますらむ

などいひすさぶるをきこしめして

さはごとにうかぶほたるは何なれや水におも火はきえずやあるらむ

(大齋院前御集、一三四～一三五)

涙河身のうくばかりなかるれど消えぬは人のおもひなりけり (元真集、三〇三)¹

はじめの『大齋院前御集』は沢水のあたりに蛍の光が見えることについて、蛍の「火」に「思ひ」を掛け、水辺にありながら消えない蛍火の光に、鎮めることのできない自らの思いを重ねている。次の『元真集』では、恋の辛さゆえであろうか、涙河の流れのように、自分自身が浮いて流れてしまわんばかりに涙を流して泣くけれど、その涙では心の思ひは消すことができなかったという歌である。ここには「浮く／憂く」、「流るれど／泣かるれど」、「思ひ／火」といった表現が掛詞として恋の辛さをかたどっている。

消えることはないと分かっているにしても、それでもやはり「思ひ」を抱えたままの苦しさを少しでも和らげようとして水辺を求めるのだろうか。だが、「水」では消しえなかったことによって、却って自らの思ひの強さに改めて気づかされてしまうことにもなるのである。

物語中、御息所は幾度も自ら光源氏への思いを清算しようと試みている。そのことは、襖を背景とした「水辺」を希求する形で繰り返し描かれる。だが、御息所がどうにもならない状況を打開しようと、縋るようにして選んだ其の行為は、結果として「思ひの火」を消すことができず、却ってその火が抑えられない状況を彼女にもたらししてしまうのである。「炎／火／水」といった歌ことばは、御息所をかたどる上でとても重い意味を持つのではないだろうか。

本論は歌ことばの発想を基軸として、御息所の描かれ方を考察するものである。はじめに〈炎〉の表現と六条御息所の関わりについて述べてゆく。

一、六条御息所と〈炎〉

御息所と「炎」の関わりが象徴的に語られるのは鈴虫巻である。鈴虫巻は、女三宮の持仏開眼供養に始まり、全体に仏教色に彩られた巻である。仏教にまつわたさまざまな道具立てが施されることの意味のひとつは、物語を生きる人物たちが亡き人々へ馳せる、どこか祈りにも似た思いが象徴されているためだといえるのではないだろうか。

先に述べた如く過酷な運命を背負った六条御息所が物語に最後に語られるのは、次に示す娘秋好中宮の言葉の中であるが、娘の口から語られる御息所の姿は、壮絶を極めていた。以下引用する。

六条院は中宮の御方に渡りたまひて、御物語など聞こえたまふ。「今はかう静かなる御住まひにししばしも参りぬべく、何とはなけれど、(1) 過ぐる齢にそへて忘れぬ昔の御物語などうけたまはり聞こえまほしう思ひたまふるに、何にもつかぬ身のありさまにて、さすがにうひうひしくところせくもはべりてなん、〈中略〉」などまめやかなるさまにて聞こえさせたまふ。

例の若うおほどかなるけはひにて、「九重の隔て深うはべりし年ごろよりも、おぼつかなさのまさるやうに思ひたまへらるるありさまを、いと思ひの外にむつかしうて。(2) 皆人の背きゆく世を厭はしう思ひなることもはべりながら、その心の中を聞こえさせうけたまはらねば、何ごともまづ頼もしき蔭には聞こえさせならひて、いぶせくはべる」と聞こえたまふ。

〈中略〉

御息所の、(3) 御身の苦しうなりたまふらむありさま、いかなる(4) 煙の中にまどひたまふらむ、亡き影にても、人に疎まれたてまつりたまふ御名のりなどの出で来にけること、かの院にはいみじう隠したまひけるを、おのづから人の口さがなくて伝へ聞こしめしける後、いと(5) 悲しういみじくて、なべての世の厭はしく思しなりて、仮にても、かののたまひけんありさまの(6) くはしう聞

かまほしきを、まほにはえうち出できこえたまはで、ただ、「亡き人の御ありさまの罪軽からぬさまにほの聞くことのはべりしを、さしるしあらはならでも、推しはかりつべきことにはべりけれど、後れしほどのあはればかりを忘れぬことにて、物のあなた思うたまへやらざりけるがものはかなさを。(7)いかで、よう言ひ聞かせん人の勤めをも聞きはべりて、みづからだにかの炎を冷ましはべりにしがなと、やうやう積もるになむ、思ひ知らるることもありける」など、かすめつつぞのたまふ。げにさも思しぬべきこととあはれに見たてまつりたまうて、「その炎なむ、誰ものがるまじきことと知りながら、朝露のかかれほどは思ひ棄てはべらぬになむ。～」

〈中略〉

中宮ぞ、なかなかまかでたまふこともいと難うなりて、ただ人のやうに並びおはしますに、いまめかしう、なかなか昔よりもはなやかに、御遊びもしたまふ。何ごとも御心やれるありさまながら、ただかの御息所の御事を思しやりつつ、行ひの御心すすみにたるを、人のゆるしきこえたまふまじきことなれば、功德のことをたてて思し営み、いとど心深う世の中を思しとれるさまになりまさりたまふ。

(鈴虫④三八八～三八九頁)

六条御息所の娘である秋好中宮は、中宮となりながらも、帝との間に子供はなかった。その帝も退位した今、頭から離れないのはことあるごとに口さがない人々のうわさとして耳に入った母六条御息所のことであり、そうした母の罪を償うべく仏道に入ることを考えていたという。右は、そんな中宮の所に、冷泉院のもとを訪れたついでに光源氏が顔を見せるという場面である。

光源氏は、秋好中宮がそのような心持で日々を過ごしていたことなど思いもよらず、傍線(1)「過ぐる齢にそへて忘れぬ昔の御物語などうけたまはり聞こえまほしう思ひたまふるに」と話しかける。彼のいう「年齢を重ねるとともに従って忘れられなくなる思い出」の内実がどのようなものであったのか、具

体的な出来事について物語ははっきりとは示さない。だが、この言葉を聞いたとき、これまでの物語を知る読者は、当然「もののけ」として夕顔をとり殺し、没後も繰り返して死霊となって登場した御息所の「過去」の物語を想起せずにはいられないはずだ。そして娘である秋好中宮にとっても「昔の御物語」といったとき、御息所が関わったさまざまなおどろおどろしい出来事がまずは頭に浮かんだのであった。

母親の過去を引き受け、苦しんでいる娘に対して「昔ばなしをしよう」というのは、あまりにも配慮に欠ける物言いであろう。こうした発言の背後には、不義の子であった冷泉帝が退位し、ようやく気兼ねなく話のできる状態になったことによる、心のゆるみがあるのかもしれない。けれども、中宮は光源氏に対し、傍線(2)「皆人の背きゆく世を厭はしう思ひなることもはべりながら」と、出家の意思あることを告げる。

中宮の申し出に対して、光源氏はまともに取り合おうとはしなかった²。しかし秋好中宮は言葉を続け、「出家」を志した理由が母御息所の供養にあることを訴える。傍線(3)～(6)「苦しうなりたまふらむ／まどひたまふらん／悲しういみじくて／くはしう聞はかまほし」は、『花鳥余情』が「是は中宮の御心に思ひたまふ事也³」とするように、御息所を想う中宮の心に即した語り口である。母がどれほどの苦しみの中にいるのか、その実情を詳しく知りたいと思いながらも、事実をあからさまにはしなかった光源氏には、直接問うこともできない。中宮に許されたのは、娘として母の菩提を弔うために出家したいと申し出ることだけだったのである。それが傍線(7)「いかで、よう言ひ聞かせん人の勤めをも聞きはべりて、みづからだにかの炎を冷ましはべりにしがな」である。

人々のうわさを聞いた中宮は「いかなる煙の中にまどひたまふらん」と母の姿、その苦しみのさまを「炎に焼かれた煙」の中に思い描かずにはいられない。御息所の姿は「炎」に包まれて語られているのである。この「炎」については、諸注釈において「地獄の業火の炎」とされ「もののけ」や「死霊」となってし

もう御息所の死後が決して平安ではなかったことがいわれている。『孟津抄』は「みやす所の瞋恚の焰を消滅したきと、漸うとしのつもるにしたがひて思はると也⁴」とする。「瞋恚」とは、「強い怒り」をいう仏教用語であり、「自分の心にたがうものをいかりうらむこと」の意であるとされる⁵。

光源氏の青年期からその人生に少なからず影響を与えてきた人物である御息所の物語は、その登場の最後を「炎」に包まれるかたちで終える。続いて御息所と「炎」について、物語全体に即して確認しておこう。

二、御息所と「炎」の表現

『源氏物語』において、「炎」の表現は、次に示すように全部で六例認められるが、そのうち半数が御息所について用いられている。

①海の中の竜王、よろづの神たちに願を立てさせたまふに、いよいよ鳴りとどろきて、おはしますに続きたる廊に落ちかかりぬ。炎燃えあがりて廊は焼けぬ。心魂なくて、あるかぎりまどふ。(明石②二二七頁)

② 篝火にたちそふ恋の煙こそ世には絶えせぬ炎なりけれ
いつまでとかや。ふすぶるならでも、苦しき下燃えなりけり」と聞こえたまふ(篝火③二五七頁)

③昨夜のは焼けとおりて、疎ましげに焦れたる臭ひなども異様なり。御衣どもに移り香もしみたり。〈中略〉木工の君、御薫物しつつ、
ひとりいてこがるる胸の苦しきにおもひあまれる炎とぞ見し
なごりなき御もてなしは、見たてまつる人だに、ただにやは」と口おほひしてゐたる。
(真木柱③三六八頁)

- ④いみじく調ぜられて、「人はみな去りね。院一ところの御耳に聞こえむ。〈中略〉ものの苦しさをえ見過ぐさでつひに現はれぬること。さらに知られじと思ひつるものを」とて、髪を振りかけて泣くけはひ、ただ、昔見たまひしもののけのさまと見えたり。〈中略〉ほろほろといたく泣きて、

わが身こそあらぬさまなれそれながらそらおぼれする君は君なり
いとつらし、つらし」と泣き叫ぶものから、さすがに物恥ぢするけはひ変らず、なかなかいと疎ましく心憂ければ、もの言はせじと思す。「中宮の御事にても、いとうれしくかたじけなしとなむ、天翔りて見たてまつれど、道異になりぬれば、子の上までも深くおぼえぬにやあらん、〈中略〉よし、今は、この罪輕むばかりのわざをせさせたまへ。修法、読経とののしることも、身には苦しくわびしき炎とのみまつはれて、さらに尊きことも聞こえたまはねば、いと悲しくなむ。」
(若菜下④二三六～二三七頁)

- ⑤みづからだにその炎を冷ましはべりにしがな (鈴虫④三八八頁)

- ⑥その炎なん誰ものがるまじきことと知りながら (鈴虫④三八九頁)

上の①は、明石巻の冒頭で光源氏が隠棲していた須磨の屋敷が火事になってしまう場面である。すべてを焼き尽くしてしまうものとして「炎」が捉えられている。①は実際に燃え上がる具体的な「炎」をさしていたが、次の②、③は「歌ことば」的な発想が重なった「炎」である。②は篝火巻において、光源氏が玉鬘に詠みかける歌、③は玉鬘に執心する鬚黒大將が、嫉妬する北の方から火取の灰を投げつけられた翌日に木工の君から詠みかけられる歌である。後にも取り上げるが、歌ことばでの「炎」は、②「恋の煙」、③「おもひあまれる」とあるように、胸のうちにある「思ひ」の「火」が一層強く燃え上がった状態をいうものであった。この二首については後に取り上げる。

そして、続く④～⑥が六条御息所にまつわる「炎」である。⑤、⑥は冒頭に示した鈴虫巻にみられる用例であるが、④はそれに先だつ若菜下巻からのものである。ここでは、御息所は「死霊」として登場し、紫の上を危篤に陥れる。引用部はその「もののけ」が光源氏に向かって語りかけることばである。御息所はいう、紫の上の病平癒のために行われる修法や読経は、死霊である自らにはただ苦しい「炎」でしかないのだ、と。ここでの「炎」は、『新潮日本古典文学集成』頭注において「地獄の責苦にも等しいというほどの気持ちであろう」とされるように、「身を焼くような炎」であると考えることができる。死後の世界においてもなお、光源氏への絶ちがたい執念が御息所を苛んでいるのである。

このように、「地獄」を連想させる「炎」に連なるのが、今回冒頭に示した、鈴虫巻における⑤、⑥の「炎」である。

物語中に見られる「炎」のうち、御息所に用いられるものは、すべて「地獄」を連想させる点が共通している。「地獄」の苦しみが「火」や「炎」とともにあることは、改めて指摘するまでもないことであるが、それが「自分自身」の中から生じたとされることには注目しておきたい。八つの「地獄」の存在を説く『往生要集』では、第六「焦熱地獄」、第七「大焦熱地獄」と、「火炎」を主体とする地獄を取り上げているが、「大焦熱地獄」に次のようにある。

汝、地獄の声を聞いて、已にかくの如く畏怖す。いかにいはんや地獄に焼かるること、乾ける薪草を焼くがごとくなるをや。(A) 火の焼くはこれを焼くにあらず。悪業乃ちこれ焼くなり。火の焼くは則ち滅すべし。業の焼くは滅すべからずと云々。かくのごとく苦に阿嘖し已りて、将ゐて地獄に向かふに、大いなる火聚あり。その聚、挙れる高さ五自由旬なり。その量、寛く広がれること二自由旬なり。(B) 炎の燃えて熾盛なるは、かの人の所作の悪業の勢力なり。急にその身を擲げてかの火聚に墮すこと、大いなる山の岸より推して険しき岸に在くが如し⁶。

傍線部（A）、（B）に示したように、地獄の火炎は、「悪業／所作の悪業」の所以であるのだという。若菜下巻での御息所は「この罪軽むばかりのわざをせさせたまへ」と訴えていた。自らの「罪」ゆえに地獄の炎に焼かれているというのである。死して尚、繰り返し人々の前に姿を現さねばならぬところに、御息所という人物が独自に背負わされた苦しみの壮絶さがあることを改めて描いた場面だといえるだろう。そうした身を焼くような苦しみを象徴するものとして「炎」という表現が選ばれたのだと考えられる。

御息所が最後に身にまとうのは、壮絶な地獄の炎であった。それは諸注釈が示すような「瞋恚の炎」と考えることができるが、「歌ことば」の発想に照らしたときに、それが御息所の心のうちにある「思ひ」が象徴されているとも考えることができるのではないだろうか。次に述べるように、「思ひ」は「火」に通じ、そこから「炎」となるという表現のうえでのつながりを指摘できるのである。

三、歌ことば的発想からみた「炎」

歌では「炎／ほのほ／ほのを／ほむら」という表現が用いられている。「ほのほ」と「ほむら」の違いについて、今の段階で明らかにすることができないが、語源的には「ほのほ」は「火の穂」をもとし、「ほむら」は「火群ら」をもととすると理解されている。即ち火の先端である「ほ」に注目するか、火の全体である「むら」として把握するかの違いだということのようである。ちなみに『源氏物語』では「ほのを」で諸本一致していた。

先に篝火巻と真木柱巻から、「思ひ」が強まって「炎」となるという発想について触れた。左に歌のみ再掲する。

篝火にたちそふ恋の煙こそ世には絶えせぬ炎なりけれ（篝火）

ひとりいてこがる胸の苦しきにおもひあまれる炎とぞ見し（真木柱）

二首はともに相手を恋い慕う強い気持ちをうたったものであり、「恋」の「火」が強さを増して「炎」となるという発想では共通している。だが、篝火巻では目に見えるのはあくまでも「煙」であり、光源氏の言葉でも「下燃え」とされるように、「火」は表面化していない。真木柱においても北の方が投げつけた火取によって焦げてしまった着物を目の前にし、嫉妬する北の方の「思ひ」を「炎」だと冗談まじりに揶揄した言葉である。真木柱巻の「炎」は、実際に燃えている「火取」の「火」に胸中にある嫉妬の「炎」を重ねた表現であったが、実際の「炎」を詠んだ歌としては次のようなものがある。

⑦ひとりゐてもゆるほのほにむかへばやかげをとみなふみとはなりぬる

(赤人集、九〇)

夜、たった「一人」で「火取」の炎に向かっていると、独りであるにも関わらず、その炎によってできた影が自分に連れ添ってくれているようにみえるという歌である。このような実際に目の前で燃えている「炎」に対して、胸のうちにある「炎」は表面的には見えないものとしてあった。『宇津保物語』菊の宴巻と『蜻蛉日記』から次に示す。

⑧おとど、御装束して会ひたまへり。物いと清らにて賜ひなどして、御かはらけ賜ふ。君だち、みなかはらけ取りたまひ、まうち君たち、巡流しなどす。御表作り果ててしばし候ふに、魂消え惑ひ、炎も見ゆる心地す。大内記思ふほどに、むかしの試作の歩みにかくおぼえしかば、出で立ちてこそは今の形ともなれ、なほこのこといたしてむ、と思ひて、宮あこ君にかく書きて奉る。

もの思ふに胸だに燃えぬものならば身より炎は出ださざらまし

隠れどころのなければにや」など書きて

(菊の宴②六五頁)

⑨年頃見知りたる人、向かひみて、「あはれ、これにまさりたる雨風にも、いにしへは、人の障りたまはざめりしものを」と言ふにつけてぞ、うちこぼるる涙のあつくてかかるに、おぼゆるやう、

思ひせく胸のほむらはつれなくて涙をわかすものにぎりける

とくりかへし言はれしほどに、寝るところにもあらで、夜は明かしてけり。

(『蜻蛉日記』天禄元年十二月、中巻、二一五～二一六頁)

⑧は『宇津保物語』菊の宴巻において、既に入内が決まっているあて宮に対して、藤英が、歌を贈る件である。「魂」が消えてしまって、代わりに執念の「炎」が見えるようだという表現は、御息所の心の軌跡を考える上で大変興味深い。胸が燃えなければ、身から「炎」は出さないのだからと、あて宮への断ち切りがたい未練を、恋焦がれる「思ひ」の「火」に喩えている。⑨は『蜻蛉日記』の作者である藤原道綱母が、夫兼家の訪れの途絶えた一年を待ち続けながら過ごした年の暮れの、やはり来訪のない雨の日に、雨風にも関わらず通ってきた昔日を思い、涙する場面である。訪れのない寂しさを表面では取り繕ってはいたものの、こぼれる涙の熱さでふと胸のうちにある自らの「思ひ」が「炎」のようであることを実感するのである。即ち、当然のことではあるが、胸のうちにある「炎」は決して実際のもののように、表面化して何かを燃やしてしまうようなものではなかったといえる。

ここまで、歌ことばの発想において「炎」が「思ひ」の「火」を一層燃え上がらせた状態を示し、胸のうちにあるがゆえに表面化されないものであることを指摘してきた。表面化されない「炎」が身を燃やすということは、本来ならばありえないことだとするのが「歌ことば」における通常理解だといえよう。

六条御息所という人物が物語の最後に見せた「炎」は、地獄の業火であったが、「もののけ」にならざるを得なかった彼女の執念を考えると、それは同時に光源氏への思いの強さが改めて対象化された結果だったともいえるのではな

いだろうか。ここで思うのは、御息所は一方で「水」の表現に関わる人物として造型されていることである。水の表現を多用されることと、炎に包まれた女君であることは、符合するのではないだろうか。続いて御息所と「水」とのかかわりを考察してゆく。

四、六条御息所と「水」の表現

鈴虫巻における秋好中宮の言葉を手がかりとして、御息所と〈炎〉の関わりの深さを指摘してきたが、御息所の造型においては、「水」にまつわる表現との関わりも指摘できる。実際に、物語において御息所か詠む歌は十一首あるが、次に示すように「水」に関わる歌はそのうちの六首に及んでいる。

- a、かげをのみ御手洗がはのつれなきに身のうきほどぞいとど知らるる
(葵②二四頁)
- b、袖ぬるるこひちとかつは知りながら下り立つ田子のみづからぞうき
(葵②三五頁)
- ・なげきわび空に乱るるわが魂を結びとどめよしたがひのつま (葵②四〇)
- c、人の世をあはれと聞くと露けきにおくる袖を思ひこそやれ (葵②五一頁)
- ・神垣はしるしの杉もなきものをいかにまがへて折れるさかきぞ (賢木②八七)
- ・おほかたの秋の別れもかなしきに鳴く音な添へそ野辺の松虫 (賢木②八九)
- ・そのかみを今日はかけじと忍ぶれど心のうちにものぞかなしき (賢木②九三)
- d、鈴鹿川八十瀬の波にぬれぬれず伊勢まで誰か思ひおこせむ (賢木②九四頁)

e、うきめ刈る伊勢をの海人を思ひやれもしほたるてふ須磨の浦にて

(須磨②一九四頁)

f、伊勢島や潮干の潟にあさりてもいふかひなきはわがみなりけり

(須磨②一九四頁)

・わが身こそあらぬさまなれそれながらそらおぼれする君は君なり

(若菜下④二三六頁)

e、f は須磨巻でのやりとりであり、他の女君についても同様に都から須磨へ行く光源氏との別れの悲しみを須磨の浦波の光景に託して詠んでいる。注目したいのは、a～dにおける「水」にまつわる表現である。葵巻から賢木巻は、まさに御息所が「もののけ」にならざるを得なかった経緯とその結果が焦点化される巻々である。このことについて「水」に関わる「表現」の問題として捉えた今井上氏は次のように指摘している。

川辺、水のイメージをはらんだ言葉が御息所にまわりつくように連鎖してゆくこと、そのこととあいまって、御息所の繰り返す「憂き」には「浮き」の掛詞が凝らされていたということである。〈中略〉御息所の嘆きをかたどる鍵語「憂き」ととりもなおさず「浮き」として、女の魂が「浮かれ」出す、その必然を言葉の面から裏打ちしてゆく⁷。

御息所にとっての「水」の表現は、縁語である「浮く」が「憂く」と掛詞にならざるをえない状況に自身の辛さを託したものであった。そして、それは、魂が抑えようもなく「浮き」、はては「もののけ」へとになってしまう展開を必然として裏付けるものであったのである。

だが、先に述べてきたように、〈炎〉に象徴される御息所の心のあり方を考え合わせたとき、なぜ御息所が「水辺」を希求したのかが理解できるのではな

いだろうか。御息所にとって、「水」は、自らの内なる「炎」を鎮火させるためにどうしても必要な「ことば」だったと考えられるのである。

a は、光源氏の正妻である葵上との車争いの後に、光源氏にかえりみられない悲しみを詠んだ独詠歌である。車争いは、葵上との立場の差を如実に思い知らせる出来事だった。歌中の「御手洗川」は『伊勢物語』六五段の次の歌を喚起させる。

恋せじと御手洗川にせしみそぎ神はうけずもなりにけらしな⁸

右の歌が呼び込まれることについては、久富木原玲氏が「褌をして神に祈ってもどうしようもなく、いやましにまさる恋を生きていかねばならない御息所のありかたをクローズアップする⁹」とされるように、どうにもならない恋の苦しみをいう証左であると考えられる。本論で問題にしたいのは、そうした苦しみに対して、御息所は必死で立ち向かっているという点である。気持ちを抑えようとするあまりに、抑え切れない「思ひ」が彼女を「もののけ」の領域へと引きずりこんでしまうという心の軌跡を問いたいのである。

御息所が自らの「思ひ」に埋没すまいとしていたことは、次のように思い起こしているところからも読み取ることができる。

御息所は、ものを思し乱ること年ごろよりも多く添ひにけり。〈中略〉つらき方に思ひはてたまへど、今はとてふり離れ下りたまひなむはいと心細かりぬべく、世の人聞きも人笑へにならんことと思す。さりとして立ちとまるべく思しなるには、かくこよなきさまにみな思ひくたすべかめるも安からず、釣する海人のうけなれや、と起き臥しわづらふけにや、御心地も浮きたるやうに思されて、なやましうしたまふ。定めかねたまへる御心もや慰むと立ち出でたまへりし御褌河の荒かりし瀬に、いとどよろづいとうく思し入れたり。大殿にはもののけめきていたうわ

づらひたまへば、誰も誰も思し嘆くに～

(葵②三〇～三一頁)

「定めかねたたまへる御心もや慰む」とは、光源氏に顧みられない寂しい心が少しでも慰められるかと思って、祭見物に出かけたことをいう。この表現は直前に見える「釣する海人のうけなれや」と同じく、古今和歌集の「伊勢の海に釣する海人の泛子なれや心ひとつを定めかねつる(恋一、読人知らず、五〇九)を引き歌としている。ここには釣り人の泛子が浮いたり沈んだりするさまに、自らの心のさまが形象されていることは先に引用した今井氏の論考にも指摘されていた。本論で注目したいのは、ここでの御息所はその浮き沈みを落ち着かせようとしている点である。

ここで、願いが叶わなかったことを「御禊河の荒かりし瀬」としている点は重要だと思われる。先にも述べたように、「禊」は「恋せじ」と光源氏に向かう気持ちを鎮めたいとする意思の表れだといえる。「御手洗川」で喚起された「禊」を希求する心が後になって再度対象化されることにより、御息所が何よりも心の落ち着きを願ったことか強調されている。それゆえに、その願いが果たされなかったことが「もののけ」の出現へと連続させられるのである。

心を慰めるために出かけたにも関わらず、そのことによって却って心が乱されることになってしまったのである。鎮めようとしなければ、自然に消えてゆくものであったのかもしれない。だが、六条御息所の理知は、そうした軌跡を自らに許すことはなかった。御息所が「思ひ」を鎮めようとしていたことは次のようなところからも読み取ることができる。

かかるもの思ひの乱れに御心地なほ例ならずのみ思さるれば、他所に渡りて御修法などせさせたまふ。
(葵②三三頁)

御息所の悲劇は、彼女が自ら制御できない心の闇を自覚していたことにある。

ことさら「もののけ」になって、相手を取り殺そうと意識したのではなかった。自分の意識としては、そうした心を落ち着かせ、鎮めようと必死になっていたのである。自分の意識ではどうにもならなかった心が御息所を「もののけ」へと変貌させてしまったのだといえよう。もし、御息所が光源氏に対して正直な心を打ち明け、泣き叫ぶことのできた女君であったなら、おそらくは人を取り殺すような「もののけ」にならずに済んだのではないだろうか。

本論は、御息所が「炎」に関する女君であることを指摘し、「水／炎」の両極の表現を抱え、その振幅の激しさに御息所という人物を規定する「ことば」があることを考察した。

¹ 『源氏物語』、『伊勢物語』、『蜻蛉日記』、『大和物語』、『平中物語』の本文は新編日本古典文学全集（小学館）により、和歌については、『新編国歌大観』による。

² 鈴木日出男『源氏物語虚構論』第六編第五章「柏木の死後」

（東京大学出版会、二〇〇三年）。

³ 『花鳥余情』の本文は『松永本 花鳥餘情』

（伊井春樹編 源氏物語古注集成第一巻 桜楓社 1978年）による。

⁴ 『孟津抄』の本文は、野村精一編『源氏物語古注集成』第五巻（桜楓社、一九八一年）による。

⁵ 中村元著『広説仏教語大辞典』（東京書籍、二〇〇一年）。

⁶ 『往生要集』の本文は、岩波文庫（石田瑞麿訳注、一九九二年）による。

⁷ 今井上「六条御息所生霊化の理路」（『源氏研究』第八号二〇〇三年四月→『源氏物語の理路』笠間書院二〇〇八年）。

⁸ 古今和歌集・巻第十一・恋歌一、よみ人しらず、五〇一。

⁹ 久富木原玲「生霊の歌をめぐる——六条御息所と和歌」

（『源氏物語 歌と呪性』、若草書房、一九九七年）。

本稿は、名古屋平安文学研究会 2007 年 6 月例会発表「みづからぞうき考—『源氏物語』六条御息所と「水」の表現—」の一部をもととしている。